

Task-Supported Language Teaching を取り入れた G30国際プログラム初級日本語の実践

—Can-do テストを用いた中級へつなげる日本語表現能力の基礎作り—

国際言語センター

田中 典子

グローバル・エンゲージメントセンター

伊藤 かな・伊藤 典子・徳弘 康代

要 旨

名古屋大学 G30国際プログラム初級日本語科目では、口頭表現・文章表現を評価する際に Can-do テストを導入している。本テストでは TSLT でさまざまなタスクを行い、学習者が大学生活や社会で求められる課題遂行能力を育成することを目的としている。このタスクにより、言語活動別の熟達度を意識しながら、言語能力記述文を作成した。レベル設定は A2 から B1, B2 へ、言語活動は産出、受容、やりとりやそれらの組み合わせ、タスクは TOA から TA や Task など、意味内容の伝達に重きを置いたものにシフトしていくことで連続性を保ち、教室外における実践的な言語運用力の養成を意識し、初級後半修了後も継続的、自律的な学習の促進を視野に入れた学修設計を目指した。

本実践では、Can-do の目標を高度に達成する学習者がいる一方で、課題の達成が難しくプログラムの進度に追いつかない学習者も一定数いた。そのような学習者への指導の工夫が今後の課題である。

キーワード

Can-do テスト, Task-Supported Language Teaching, Task-Oriented Activity, Task Activity, Task

目 次

1. はじめに
2. Can-do 達成とタスクを用いた授業
3. 授業の概要
4. Can-do テストとしてのタスク

- 4.1 各課の Can-do ・レベル ・言語活動 ・タスクの内容
- 4.2 Can-do のレベル ・言語活動によるタスクの分類
- 4.3 タスクの種類傾向
- 4.4 タスクの分類のまとめ
5. Can-do テストとして行ったタスクと実際のパフォーマンスの振り返り
 - 5.1 TOA (Task-Oriented Activity)
 - 5.2 TA (Task Activity)
 - 5.3 Task
 - 5.4 まとめ
6. 教師の FB, サポート
7. 学習者の Can-do テストやタスクのとらえ方
8. まとめと今後の課題

1. はじめに

国際プログラム（学部）はそれぞれの専門を英語で学ぶ学部4年間のプログラムで毎年40～50名の留学生を受け入れている。研究の言語としては英語が指定されているが、一定のサポートはあるものの、日常生活、大学生活を日本で送る学生には必修外国語として日本語が指定されている。また、彼らの中には日本での大学院進学や、日本での就職、帰国後も日本での経験を生かした研究や仕事に就くことを計画している学生も多く、日本語は一定期間学ぶ単なる外国語以上のものとなっている。初年次に履修する総合日本語1・2および日本語セミナー（コミュニケーション）1・2（現日本語1～6、日本語表記1, 2）は今後の日本での生活の中で彼らを支える基礎となる科目である。そこで、日本語で自らの道を切り拓けるよう、言語知識の

みならず、日本社会で生きていくコミュニケーション力が身につくように日本語初級クラスでは運用力を育成するための Can-do を取り入れている。

G30日本語初級クラス後期では、メインテキストとして『日本語初級2大地』¹を使用し、各課の文型や語彙などの言語知識を測るのに筆記試験を、また、口頭表現・文章表現を評価する際には Can-do テストを導入している。この Can-do テストではさまざまなタスクを行っている。

Can-do とは、言語を使ってできることを「～できる」という形で示した言語能力記述文であり、行動中心アプローチという考え方が背景になっている。行動中心アプローチにおける言語教育の目標は、言語の使用者や学習者がそれぞれの社会で求められる課題遂行能力を育成することである。このような言語的な課題を具体的に示すために、言語能力記述文 Can-do が作られている（文化庁、2022：9）。

Can-do のような行動目標の達成を確かめるためのアセスメントとして、G30日本語初級クラスではタスクを用いた。本稿では Can-do テストとして行ったタスクについて振り返り、日本語表現能力育成にどのように結びつけていくことができるか、その可能性と課題を探った。さらに、学習者が今後大学生活を送るうえで必要な日本語表現能力の基礎を築くにあたりどのようなタスク設定をしたか述べる。

2. Can-do 達成とタスクを用いた授業

タスクについてはさまざまな定義があるが、高島（2005）は Ellis（2003）を参照し、タスクを以下の4

つの特徴を持つ、課題解決型の活動と定めている。

- (i) 言語を使う目的がある。
- (ii) 意味内容の伝達が第一義である。
- (iii) 話し手間に、情報・考えなどの何らかの差がある。
- (iv) 学習者が自分で考えて言語を使う。

また、シラバスにおけるタスクの位置づけとして、Ellis（2003）は2つの立場があるとしている。

1つは、Task-Based Language Teaching (TBLT) であり、タスクをシラバスの軸とし、タスクを行うことを通して、その過程で生じる言語使用を取り上げて言語教育を行う方法である。

もう1つは、構造シラバスや機能シラバスのような文法構造を指導するシラバスの中でタスクを補助的に実施したり、そのようなシラバスと TBLT を併用したりする Task-Supported Language Teaching (TSLT) である。

G30日本語初級クラスは文型を中心に構成された構造シラバスであり、その中で Can-do テストとしてタスクを実施した。つまり上記の立場でいえば、TSLT といえる。体系的な言語知識を構造シラバスで組み立て、運用能力を補強する部分として Can-do テストを、学習者のレベルと学習項目に合わせて段階に応じて決定するプロセスシラバスで組み込んだ。

タスクには様々な段階がある。高島（2005）は、TSLT の1つの試みとして以下のモデルを提示している（図1）。このモデルでは、教室における言語活動は、言語形式の指導に重点を置いたものと、意味内容の伝達に重きを置いたものとに分けられ、これらは焦点の度合いを変えながら連続性を持っているとして

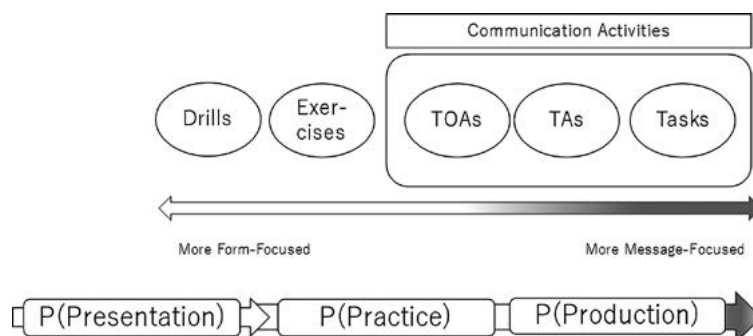


図1 主な5つの言語活動の相互関係と3Ps
出典：高島（2005：8）の図1-3

¹ 『日本語初級2大地』山崎佳子、石井怜子、佐々木薫、高橋美和子、町田恵子著 スリーエーネットワーク

いる。これらの言語活動を「タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity) (以下 TOA)」「タスク活動 (Task Activity) (以下 TA)」「タスク (Task) (以下 Task)」と目的別に分け、さらに Drill, Exercise を加え、5つの言語活動の違いが分かるように直線状に並べている。高島は、大切なのは教師が言語活動の目的を意識し、その位置付けを把握しておくことだと述べている。

TOA は TA の前段階の言語活動として言語形式の定着のために、モデル・ダイアログや語彙を与えながらも、Task や TA と同様に課題解決を目標に持つ。原則として対話形式の活動や発表を指す。

TA は、モデル・ダイアログや語彙の提示はないが、会話の進行が段階的に示される。

Task は達成すべき目的のみが示され、課題解決に至るまでの過程、つまり、会話の展開方法は学習者が考える。(高島 2005)

G30日本語初級クラスにおいても、上記のモデル同様、文型導入後、Drill, Exercise を行い、タスク (Can-do テスト) を行った。その詳細については4章と5章で振り返る。本稿ではこれら TOA, TA, Task を総称する場合カタカナ表記でタスクと記述する。以下表 1 (高島2005:11) で3つの違いを示す。

表 1 TOA, TA と Task の主な特徴の比較

主な特徴	TOA	TA	Task
(a) 意味内容の伝達に重きを置く	○	◎	◎
(b) 活動目標の達成 (過程) に重きを置く	◎	◎	◎
(c) 情報の授受・交換の有無	◎	◎	◎
(d) 情報 (量) の差	◎	◎	◎
(e) 段階を追った指示の有無	◎	◎	×
(f) モデル・ダイアログ, または, 使用する文法構造などの指定の有無	◎	×	×
(g) 2つ以上の文法構造の比較	×	◎	○
(h) 意味のやり取りの有無	△	◎	◎
(i) 活動や得られる情報に対する興味, 動機付けに 重きを置く	○	◎	○

(表中の印は各項目の必要条件を表し、◎は必須、○はある方が望ましい、△はなくてもよい、×は不要であることを示している) 括弧内の注釈とにも出典:高島 (2005:11) の表 1-1

それぞれのタスクの違いとしては主に表 1 の太枠内の特徴の有無が挙げられる。TOA と、TA・Task の大きな違いには、モデル・ダイアログの提示などの言語的な指定の有無がある。また、TOA・TA までは段階を追った指示が与えられるが、Task にはそういった指示はなく、学習者が目的達成のためのすべてを自ら選択し考える自由度の高いものになる。また、TOA より TA・Task のほうが、意味内容の伝達が重要視される。G30日本語初級クラスにおいても、タスクを TOA から TA, Task といった段階を踏んだものにし、各課に配置した。

構造シラバスの教科書をベースに、Can-do を達成するためにタスクを用いた授業例として、斎藤 (2016) の実践報告がある。この実践は課題遂行型のテキストへの移行措置として行われたもので、斎藤 (2016) は、『みんなの日本語』の各課に行動目標 (Can-do) を設

け、構造シラバスの中でタスクを実施した。授業実施にあたり、まず Can-do 選択後にタスク例を決定して各課に配置し直し、各課の課題遂行を明示する。タスクの実施は語彙や言語形式の練習後に行う。文型積み上げ型の教科書を使い、課題遂行型の授業を行う困難さとして、斎藤は課によっては Can-do と関係ない文型があったことを指摘している。その場合、教科書の各課の言語形式を同等に扱うのではなく、課題遂行に必要なものとそうでないものの比重を変えることで、学習者自身が何が必要かを考える道を示せたという。

本学 G30日本語初級クラスも構造シラバスであるが、各課の Can-do の提示のタイミングを、文型や語彙などの言語知識の導入、練習を行った後とした。『日本語初級 2 大地』は日本語学校で学ぶ各国からの学生が登場人物であり、その後専門を生かした道に進んで夢を実現するという設定の教科書である。また、練習問

題はドリルのほかに、インフォメーションギャップやインタビューとその発表、スピーチ、作文など、多様性に富んでいる。内容面も日本の文化・社会・生活情報に触れる練習が取り入れられており、日本で学ぶ学習者の学びの進度に合わせ、彼らが現実に遭遇する場面で Can-do を設定することが可能だった。Can-do を言語知識の導入、練習後に提示する理由は、学習文型や語彙の導入、練習の様子を見て、どのような Can-do にするのが学習者にとって良いか見極めてから提示したほうが彼らの現状に即したものにしやすいからである。Can-do の決定は、コーディネーターの経験をもとに、暫定的なものが組まれてはいたが、授業の定着度を見ながら、その都度決定された。運用能力を補強する部分としてのタスク決定はプロセスシラバスで組み込み、各課のドリル練習終了後、タスク (Can-do テスト) が告知され、次の課に入る前に Can-do テストが

課され、評価、フィードバック (以下 FB) はその都度行われた。

今回、設定した Can-do とそれを実現するタスク (Can-do テスト) の内容、学習者の課題達成状況について、振り返りを行い、Can-do テストについて、検証していきたい。

3. 授業の概要

2022年春学期のクラスは2021年秋学期にスタートした初級前半に続く初級後半のクラスで、同レベルで2クラス開講された。各クラスの人数は12名ずつであった。授業は週5日、1日1コマで全15週で構成された。テキストは『日本語初級2大地』をメインテキストとして週4日使用した。週1コマは集中的に漢字²を学習する時間とした。

表2 1週間の学習の流れ

日	メインの課	前の課の復習 (授業冒頭20~30分)
1日目	n 課 語彙・文法導入	n - 1 課 文法テスト
2日目	n 課 ドリル・会話練習, Can-do 提示	n - 1 課 Can-do テスト
3日目	漢字復習・漢字導入	漢字クイズ
4日目	n + 1 課 語彙・文法導入	n 課 文法テスト
5日目	n + 1 課 ドリル・会話練習, Can-do 提示	n 課 Can-do テスト

2日に1課の進度で進み、課の1日目が語彙・文法導入で、課の2日目は該当課のドリル練習・応用練習に進む。新しい課に進む前に、週の真ん中に漢字学習日を配置し、Can-do テストの提示は各課の学習の2日目のドリル後にし、目標とともにクリアすべき基準と内容をその都度示した。

次に課を進める際、前の課の文法事項の定着を図るために、授業冒頭に文法テスト、Can-do テストをそれぞれ日をつけて実施した。それぞれのテストの実施時間は20分から30分として、文法テストは翌週に返却、Can-do テストは実施教師がその場で簡単な FB を行い、パフォーマンスについては授業報告にて A +, A, A -, B +, B, B -, C +, C, C - の各該当者と留意事項を教師間で共有した。Can-do テストは後半では

中級日本語への橋渡しを意識した総合的なものになった。教科書5課ごとにまとめた復習テストが計4回実施されたが、Can-do テストもそのうちの初回を除く3回に組み込まれた。

Can-do テストの内容は学習者の様子、定着度、文型の難易度も考慮して、授業を進めながら教師間で共通理解をとって、決定していった。

4. Can-do テストとしてのタスク

この章では、『日本語初級2大地』の各課で設定した Can-do の言語能力記述文、レベルや言語活動を示すとともに、それを達成するために行ったタスクを高島 (2005) が示した分類をもとに分け、各課でどのよ

² 『Write Now! Kanji for Beginners』(スリーエーネットワーク)を使用した。

うなタスクが用いられたか、全体としてどのような傾向があったかを分析する。

4.1 各課の Can-do・レベル・言語活動・タスクの内容

各課の Can-do・レベル・言語活動・タスクの内容を表3に示す。Can-do の言語能力記述文、レベル、言語

活動は CEFR と JF スタンダード³を、タスクの種類は高島 (2005) を参照した。タスクは TOA, TA, Task に該当しないものを「その他」とした。「その他」は Can-do の状況に即したものではあるが、会話の暗記である。

表3 『日本語初級2大地』各課の Can-do とそのレベル・言語活動、及びタスクの種類・内容

	トピック Can-do	レベル	言語活動	タスク の種類	タスクの内容	備考
L.23	国の気候 (1, 2 共通) 1. 自分の国の季節の移り変わりについて、天気、寒暖などの簡単な情報を短い文で書くことができる。	A 2	産出	TOA	モデル文有 p.6「使いましょう」 自国の気候を紹介する文を書く。	
	2. いろいろな国の人の集まりなどで、メモをとるとき見ることができれば、自分の国の気候について短い簡単な発表をし、発表内容の事実確認などの簡単な質問に対応することができる。	A 2	産出 やりとり	TOA	上記の内容を発表する。	
L.24	来日前後比較 日本へ来てからできるようになったこと、できなくなったことについて、短い簡単な言葉で友人に語るすることができる。	A 2	やりとり	TOA	モデル文有 p.12 4-2. 「日本に行ったら、何ができなくなるか/何が出来るようになるか」について話す。	※実施時点で非来日者がいたため、来日組と非来日組でペアを組んだ。
L.25	部屋探し 不動産サイトの情報を見ながら、友人にこれから住みたいところやその理由などについて、短い簡単な言葉でコメントや質問をしたり、質問に答えたりすることができる。	A 2	受容 やりとり	TOA	モデル文有 p.18「使いましょう2」 実際の不動産サイトを見て、自分が本当に住みたい部屋について話す。その理由も述べる。	※この「受容」は不動産サイトの情報の読み取りを示す。
L.26	国のルール・義務 お互いの国のルールを短い簡単な言葉で友人に質問したり、質問に答えたりすることができる。	A 2	やりとり	TOA	モデル文有 p.24「使いましょう」 国でしなければならないことについて2つ話す。	
L.27	電話で欠席の伝言 学校や職場に、電話で休みや遅刻の連絡をすることができる。	A 2	やりとり	その他	p.25の会話暗記 欠席について自分で電話をかけて伝える。	
L.28	国の自然災害 (1, 2 共通) 1. 国の自然災害について簡単な情報を短い文で書くことができる。	A 2	産出	TOA	モデル文有 p.38「使いましょう2」 自分の国の自然災害について書く。	
	2. いろいろな国の人の集まりなどで、メモをとるとき見ることができれば、国の自然災害について短い簡単な発表をし、発表内容の事実確認などの簡単な質問に対応することができる。	A 2	産出 やりとり	TOA	上記の内容を発表する。	

³ 各課の Can-do のレベル、言語活動は、国際交流基金日本語国際センター「みんなの Can-do サイト」<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do> を参照した。

L.29	アルバイト探し 求人雑誌などの、短い文に目を通して、条件や仕事内容など、就職活動のために必要な情報を探し出すことができる。友達にどの仕事にするか、その理由も伝えることができる。	A 2	受容 やりとり	TOA	モデル文有 p.44「使いましょう」 ペアでアルバイト求人(レアリア)を見て、アルバイト探しの会話をする。どのアルバイトがやりたいか、理由を述べる。	※理由を明瞭に述べたか、相手とのターンのやりとりが自然かも評価対象 ※この「受容」は求人雑誌などの情報の読み取りを示す。
L.30	将来の夢-1 将来やりたいことや国に帰ってからやりたいことなどについて、短い簡単な言葉で質問したり答えたりすることができる。	A 2	やりとり	TOA	モデル文有 p.45「会話」 ペアで将来自分がしたいことについて、理由もつけて話す。	
L.31	大学祭の企画発表 企画会議などで、あらかじめ準備してあれば、自分の企画案について短い文で説明し、質問に答えることができる。	A 2	産出	Task	グループで名大祭の企画を立て、ポスター1枚を作り、プレゼンする(出てきた企画案:メイドカフェ/スイーツカフェ/タイ料理/アーチェリー)。	※言語形式の指定無 (unfocused on form)
L.32	名古屋大学への意見 (1-3共通) 1. 名古屋大学のよい点や課題、改善案を書くことができる。	B 1	産出	TA	プリントで、意見文の流れを提示 名古屋大学についてよい点、よくない点を挙げ、よくない点については改善案を書く。	(L.26-32 復習テスト 作文テスト)
	2. 名古屋大学のよい点や課題、改善案について、書いたものときどき見ながら発表し、簡単な質問に答えることができる。	B 1	産出 やりとり	TA	上記の内容を発表する。	※対教師で一人で発表 (L.26-32 復習テスト 会話テスト1)
	3. 名古屋大学のよい点や課題、改善案を述べたりして、ディスカッションに参加することができる。それらの意見をまとめることができる。	B 1	やりとり	TA	プリントで話し合いの流れを提示 グループで名古屋大学への提言をする。司会者とフロア全員意見を言う。司会者も意見を述べる。グループ全体でひとつの提言をまとめる。	※討論はグループ全体で評価 ※よい提言が出てきたら、副総長に持って行くことを実施前に告知 (L.26-32 復習テスト 会話テスト2)
L.33	友達を誘う 友人を誘うために、イベントの日時を伝え、一緒に行くかどうか、短い簡単な言葉でたずねたり、誘いに答えたりすることができる。相手の条件を受け、代替案を出すことができる。	A 2	やりとり (インフォーマル)	TOA	モデル会話有 p.69 1-9. 友達を誘う。条件をつけて誘いを受ける。会話を自然に終結させる。	※ G30の学習者はインフォーマルな場面で話すことが多くなるため、Can-doで友達の会話が自然にできるように指導
L.34	励ます 簡単な言葉で感情を表現することができ、感謝も表現できる。がっかりしている人に対して、短い簡単な言葉で声をかけることができる。	A 2	やりとり	TOA	モデル文有 p.71 本文会話 がっかりしている人を励ます。	
L.35	便利なもの 所有物の便利な点、不便な点、どこで売っているのかについて短い言葉で伝えることができる。	A 2	やりとり	その他	p.77 会話暗記 「小さい傘」の便利な点、不便な点、どこに売っているかを伝える。	※会話を覚え、自然に会話らしく話す。

L.36	国の産業（1, 2共通） 1. 自分の国の産業や輸出入についての簡単な情報を短い文で書くことができる。	A 2	産出	TOA	モデル文有 p.88 4-3. 自分の国の産業と輸出入について書く。	
	2. いろいろな国の人の集まりなどで、自分の国の産業や輸出入について短い簡単な発表をし、発表内容の事実確認などの簡単な質問に対応することができる。	A 2	産出 やりとり	TOA	上記の内容を発表する。	
L.37	グラフ発表 あらかじめ準備してあれば、自分の選んだグラフを示しながら、そこそこ正確に説明し、ゆっくりであれば質問に対応することができる。 グラフのプレゼンテーションができる。	B 1	産出 やりとり	TA	発表の流れを提示 グラフを1つ選び、なぜこのグラフを見せたいのか、最初に説明する。グラフに関する用語を説明し、どんなグラフか、このグラフから何がわかるか、考えられるかを話す。	※スライド1枚目はグラフ、2枚目は使用語彙の説明、及びグラフ説明、考察のスクリーンショット。発表時見せるのは1枚目のみ。 ※発表時と準備の1コマ、日本人学生のゲストあり。 (L.33-37 復習テスト プレゼンテーション)
L.38	災害に備える 授業のプロジェクトなどで、災害に関する意識と備えについて調査するために、指示された場所について調べ、どうすればいいか発表することができる。	B 1	受容産出	Task	「海の近く」「名古屋駅」「栄の地下街」「アパート（夜）」での災害時の行動対策・常日頃の心構えをまとめ、グループで発表する。	※ここでの「受容」は指示された場所について書かれた情報の読み取りを示す。
L.39	困ったこと 異文化体験の出来事（困ったこと、うれしかったこと、びっくりしたことなど）について、理由とともにまとまりのある言葉で友人に伝えることができる。聞き手は驚き、幸せ、悲しみ、興味、無関心などの感情を表現し、相手の感情に反応することができる。	B 1	やりとり	Task	ペアで会話 日本へ来て困ったこと、うれしかったこと、びっくりしたことについて理由とともに話す。	※言語形式の指定無 (unfocused on form) ※聞き手はあいづちやコメントなどで自然に反応する。
L.40	ディベート（トピックは各チームで決定） 大学のゼミのディスカッションで簡単な説明や理由を交えて自分の意見を述べることができる。会話や議論を進めるために、基本的な言葉や方略の中から持っているものを利用できる。 議論の中で合意点を要約し、話の焦点を整えることができる。誰かが述べたことを部分的に繰り返して、互いの理解を確認し、計画通り話が展開するのに寄与できる。他の人を話し合いに誘い入れることができる。	B 1	産出 やりとり	Task	学習者が決定したトピックは以下の4つ。 Aクラス 「3歳児の英語教育の是非」／「オンラインと対面授業」 Bクラス 「高校生のアルバイトについての是非」／「4年間寮に住むことについての是非」	※学習者はいずれかの賛成派と反対派に属す。 参加していないメンバーは司会とジャッジを担当した。 ※ p.114 教科書の例は立論・反駁・反論などの手順は記載されていない。
L.41	ゲストの紹介 敬語で目上の人とやりとりできる。 その場の状況や、聞き手に応じて、内容、話し方を調節することができ、その場の状況にふさわしい丁寧さの言葉遣いができる。	B 2	産出 やりとり	その他	p.115 会話暗記 来日ゲストを迎え、全体に紹介してゲストに質問をする。	

L.42	将来の夢-2 1. 夢や希望、野心を述べる ことができる。	B1	産出	TOA	モデル文有 p.123 2-2. 謙譲語を使い、自分の専攻 や将来の夢を話す。自分 の専攻と将来の夢は関連 を持たせる。	※対教師で一人で発表 (L.36-42 期末テスト 会 話テスト1)
	ビジネスにおける電話 2. 必要なことの要件についての 短い、簡単なメッセージを直接電 話で敬語で伝えることができる。	B1	やりとり	TOA	モデル文有 p.125 「使いま しょう2」 仕事の取引先に電話をか け、相手がいないので伝言 する。敬語を使う。	(L.36-42 期末テスト 会 話テスト2)
	旅行のアドバイス 3. 自分の国のお薦めの場所の情 報について、敬語で目上の人とや りとりできる。その場の状況や、 聞き手に応じて内容、話し方を調 節することができ、その場の状況 にふさわしい丁寧さの言葉遣い ができる。	B2	産出 やりとり	TA	プリントで会話の流れを 提示 目上の知り合いが学習者 の国に行くので、学習者は いくつか質問をして旅行 のアドバイスをする。敬 語を使う。	(L.36-42 期末テスト 会 話テスト3)

・ページ番号は『日本語初級2大地』のページを示す。

・2022年春学期は2022年5月9日(テキストL.28)より対面授業を開始した。L.24 実施時点(2022年4月19日)では、来日者はクラスの半数程度で、授業はオンラインで実施した。

Can-do テストのトピックは課の「会話」やドリル、「使いましょう」で扱っているものから選定のほか、L.42のように自分でグラフを探すところから始めるものも設定した。また、L.40のディベートの回は、教科書に例として挙げられているものの他、学習者が自身で話し合いたいトピックを決めるところから始めた。L.27, L.33, L.34, L.41は言語機能に焦点を当てた。言語能力記述文は生活・留学・就労の分野を網羅するように具体的に作成した。

4.2 Can-do のレベル・言語活動によるタスクの分類

上記の表3に示したCan-doのレベルの内訳を表4に、言語活動の内訳を表5に示す。

表4 Can-do のレベルの内訳

レベル	A1	A2	B1	B2
割合	0	59% (16/27)	33% (9/27)	7% (2/27)

期の前半はA2から進め、課が進むに従って、Can-doのレベルをA2からB1, B2にした。たとえばL.30とL.42は同じ「将来の夢」というトピックを扱ったが、L.30ではA2, L.42ではB1である。A2は全体の59%, B1は33%を占めている。B2のうち、L.40と期末テストで実施したL.42「旅行のアドバイス」は敬語を自在に操ることができるという点を考慮しB2

とした。

表5 言語活動の内訳

言語活動	産出	やりとり	産出 やりとり	やりとり 受容	産出 受容
割合	26% (7/27)	37% (10/27)	26% (7/27)	7% (2/27)	4% (1/27)

言語活動は「やりとり」が最も多く、37%である。次に「産出」「産出とやりとり」の組み合わせが続き、それぞれ26%である。「産出とやりとり」の組み合わせの例としては、発表と質疑応答の組み合わせのほか、L.40のディベートのように、自分の意見を述べる(産出)と同時に議論を進める(やりとり)活動が挙げられる。「やりとりと受容」は7%、「産出と受容」が4%であった。ここでの「受容」活動はすべて「情報の読み取り」であり、「受容」単独での活動はなく、どれも「産出」や「やりとり」を行うための前段階の活動である。例えば、L.25では不動産サイトの情報を見ながら(受容)、これから住みたいところやその理由などについて質問したり答えたり(やりとり)している。

4.3 タスクの種類の傾向

高島(2005)の分類をもとに、Can-doテストをタスクの種類別にまとめたものを以下の表6に示す。

表6 タスクの分類

タスクの種類	TOA	TA	Task	その他※
全体に占める割合	67% (15/27)	19% (5/27)	15% (4/27)	9% (3/27)

※その他：3種類のタスクに該当しないもの（Can-doに即したものではありませんが、会話の暗記であったため、高島の定義したタスクにはあてはまらなるとみなした。）

高島(2005)のモデルを基に G30の授業の流れを示すと以下のようなパターンになる。なお、「その他」はタスクに該当せずと見なしたため、図2にも含まない。

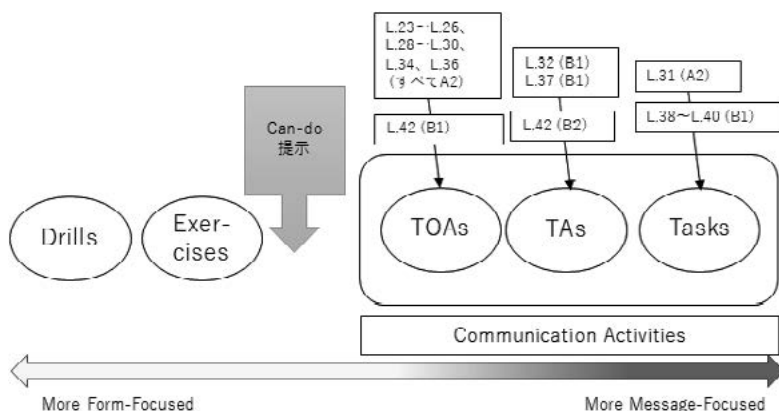


図2 Can-do 提示と各課のタスクの配置

前半のL.23～L.30までの課はすべてTOAで実施し、L.31以降は Can-do の内容により、TOA の他に TA や Task を実施した。

4.4 タスクの分類のまとめ

各課の Can-do のレベル、言語活動、タスクの種類についてまとめると、Can-do のレベル設定は後半に行くにしたがい A2 から B1, B2 へ、また、タスクは TA や Task など、意味内容の伝達に重きを置いたものにシフトし、教室外における実践的な言語運用力の養成を意識した。

Can-do テストは各課1つを基本としたが、復習テストで実施した場合は1つの課で複数実施し、該当するレベルや言語活動、タスクの種類を組み合わせた課もある。L.26-32 復習テストで実施した L.32 の Can-do テストでは3日に分け、3つの TA (タスク活動) を課した。1つは「名古屋大学への意見」を自身でまとめる作文 (B1, 産出)、もう1つは作文をもとに、インタビューに「名古屋大学への意見」を述べ、その質問に答える口頭活動 (B1, 産出とやりとり)、最後はグループを編成し、それぞれが書いた提言をもとにしたグループディスカッション (B1, やりとり) である。L.36-42 期末テストで実施した L.42 の Can-do テストも3日で3つのタスクを実施した。TOA の将来の

夢を語るモノローグ (B1, 産出)、TOA の待遇表現 (敬語) を運用した会社に電話をかけるビジネス場面の伝言 (B1, やりとり)、TA の目上の人物に旅行のアドバイスをする待遇表現 (敬語) を運用した電話タスク (B2, 産出とやりとり) である。L.42 の期末テストの Can-do テストは初級の集大成でもあり、B1 と B2 とし、中級レベルへの橋渡しであることを意識した。

5. Can-do テストとして行ったタスクと実際のパフォーマンスの振り返り

本章では、タスクの違いと学習者のパフォーマンスについて、振り返りを行っていく。

5.1 TOA (Task-Oriented Activity)

TOA (タスク志向型活動) は言語形式の定着を測るもので、指定されたモデル・ダイアログに従い活動する。学習者は暗記型を得意としており、モデル・ダイアログがあることで、自分の情報を代入することで一定のレベルに達するため、これらの活動は、事前に準備する時間を取ることでさえできていれば、問題なくこなせていた。評価が高い学習者は単なる暗記から、自分のものに咀嚼した上で、発話していたことがうかがわれた。

また、TOA ではあっても、L25「部屋を探す」、L29「アルバイトを探す」のタスクは、学習者が寮を出るためにアパートを探す時期、生活費や学費のためにアルバイトを探し始める時期と重なっており、実生活に役立つ真正性の高い活動となっていた。そのため、例えばL25の「部屋を探す」では、すでに部屋を見つけた学習者が、自分がその部屋にした理由を述べながら、相手の学習者に部屋探しのアドバイスをするなど、相手が必要とする情報を伝えるためにモデル・ダイアログに頼らない自身の経験を語る会話、真の情報交換が行われていた。

一方、評価が低い学習者は、暗記だけで精一杯で、棒読みで終わってしまうタイプと、流暢性は高くても、タスクを単なる型としてしか捉えていないため、実際のパフォーマンスにおいて、相手に自分の話していることが伝わっているかどうかを配慮せず、自分のパートのみで相手の反応を見ないで話すタイプがあった。後者は、見かけ上会話が進行し成立していたが、聞き手に不快感を与えるようなものもあった。言語形式だけへの意識では足りないことが見られた。

5.2 TA (Task Activity)

TA (タスク活動) ではモデル・ダイアログは示されず、段階を追った指示のみで、より実践的な言語使用に近づく。自身が何を相手に伝えたいのかを考え、内容の検討から始めなければならない。評価が高い学習者は内容に興味を持って取り組むことができおり、多くはそれらがパフォーマンスに反映されていた。談話構造も流れに沿っているため、聞き手が理解しやすかった。評価の高い学習者に対しては、L38のグラフ発表での環境問題について、ゲストで来ていた日本人学生から発表の態度、内容について自分達も手本にしたいとのコメントがあった。

また、TA であっても、真正性が高い活動は可能であり、L32の「名古屋大学への意見」(TA) では教師が学習者の意見を、いい意見があれば大学側に伝える予定であることを示したところ、名古屋大学のよい点として緑が多い、勉強する環境がよい、毎日新しい経験をしているなどとともに、以下のような自身が日頃気になっている点が挙げられた。「案内の地図に建物の名前が書かれていない」「ポータルに届く情報が多すぎる」「英語を話せるスタッフが少ない」「水飲み場が少ない」「ハラル料理がない」「防犯対策が手薄ではな

いか」などである。不満に思っている点についても同時に改善提案点を挙げることでできていた。日本人学生との交流が少ない点については、他大学の相棒システムのようなものを導入するとよい、ネット環境に関してはWi-Fiのルーターをもっと設置してほしい、昼休みに食堂が大変混んでいて12時から13時の時間内に利用が難しいことに関しては、食堂にテイクアウトがあればよい、外に食べられるスペースがあるとよい、フードトラックなどがあるとよいなどの提案をした。あるグループはいい点、よくない点ともに、一人があげるとそれに対して他の二人が自分の経験を語り、話に厚みを持たせ、だれかが出した意見を掘り下げるのが上手だった。また他のグループでは、よくないと挙げた点についても、改善点というより、違う角度から見れば将来につながるなどの意見が出ていて多面的に議論が進められていた。

一方、TA ではモデル・ダイアログなどの型がないことにより、聞き手には自身の発話内容が事前に予測できないことから、相手にわかるように配慮して話さないと、聞き手は取り残され情報が伝わらずに会話が一方的に終わってしまうことがある。意味内容の伝達に失敗する例としては、言語知識あるいは運用力が不十分なことに起因するものと、反対に流暢性が高いため話す速度が速く、聞き手が理解しているかどうか確認せずに話し続けるなど、聞き手への配慮を行わないことに起因するものがあった。

5.3 Task

Task では、達成すべき目的のみが示され、課題解決に至るまでの過程、つまり、会話の展開方法は学習者が考える。そのため、より現実世界でのコミュニケーションに近い活動になる。学習者は設定を演じることから離れ、内容から言語形式まですべてを自分で選択する。ハードルが高くなるが、内容に集中できる。

L31の「名大祭企画発表」(Task) では、各グループは意見の交換を活発に行いながら企画を決めていった。さらに発表時にはオリジナリティがあったグループは企画内容を伝えるために、発表・宣伝形式から離れ、学祭に行く人物が自身のグループの企画の前で、興味を惹かれて立ち止まった設定で、寸劇方式で企画内容を伝えた。

L38「災害の準備」(Task) では、評価の高かったグループは、学習者の実生活で生じ得る問題を解決する

ことを理解し、「海の近くで地震があった場合」の対策として、「津波避難ビルのマーク」の意味や避難場所を調べ、身を守るための有益な情報を探し出していた。

L40のディベート(Task)では、決定したトピックについて、内容にフォーカスした、白熱した議論ができていた。あるトピックのディベートでは、賛成グループ、反対グループの議論が白熱しすぎたあまり、議論の流れよりも、ジャッジが自分がどちらの意見を好むかを中心に多数決を行う場面があり、ディベート内容自体を正当にジャッジされなかったチームにジャッジへの不満が残るという一場面もあった。

また、TaskのCan-doの評価は、個人の評価だけではなく、タスク内容により、グループ発表の場合はグループで行うと予告したが、それにより、グループで協力しあう姿勢が見られ、個々の特性を生かした役割分担を工夫して全体でのパフォーマンスの完成度を高くする協働が見られた。パフォーマンスが苦手なメンバーには比較的話しやすい、最初と最後の部分を振って、グループ全体で連携するなど、全体を見る余裕のある、能力の高い学習者が自身の役割だけで精一杯の学習者をフォローする様子が見られた。

ただし、これらの協働がうまくいったグループばかりとは限らず、全員がだれかがやるだろうと、事前に準備することになっていたポスターを制作しないまま本番を迎えてしまったグループもあった。自分の担当分しか発言できない学習者と、足りない部分をカバーするところまでは見渡せない学習者の組み合わせもあり、全体で見るとパフォーマンスの質が下がることもあった。

5.4 まとめ

前半にTOAを配置したことで、モデル・ダイアログが学習者のパフォーマンスの支援につながっていたことが観察された。TOAからTA、さらにTaskに段階が進むことで、学習者のハードルは高くなるが、実践につながる言語活動により動機づけが高まっていることが観察された。また、Taskの場合は準備期間を授業内に設けていたので、専門の勉強で忙しい学習者はこれらの時間を活用して、授業時間外に過度な負担にならないよう工夫する努力が見られた。またクラウド上のファイルを共同編集することで、スクリプトや流れを共有して、全員でのリハーサルができなくても、上手に練習してくるグループもあった。授業での

準備時間に日本人学生がゲストとして招かれることもあり、各クラス複数の協力者が得られた。

課題として残ったことは、これらの予定されたスケジュールでは、学習や準備が追いつかない学習者もいたことである。特にTAやTaskにおいては、一部の学習者はTOAのようにモデル・ダイアログに頼ろうとするため、それがないと課題の目標到達には不十分であった。自由テーマの場合は、ネットに書いてあることをそのまま発表原稿に書いてきて読み上げることで終わってしまい、内容の咀嚼や自分がそのデータをどう見たかまでは及ばないまま消化不良で終わり、準備段階でコメントやFBを受けていても、それを形にできないまま終わってしまった学習者もいた。

6. 教師のFB, サポート

本章では、Can-doテスト実施に際しての教師のFBやサポートと、その課題を概観する。

教師のFBは、各課の授業冒頭でCan-doテストを行う場合は、その日の本課の内容時間を確保するため、手短かにこなす必要があった。

TOAの場合、パフォーマンスがレベルに達していれば、簡単なコメントもしくは褒めことばのみで終わり、不明点があれば、それらを指摘する。FBは言語形式に関するものが多くなり、内容まで掘り下げる時間はない。一方、TAやTaskの場合、「意味を伝える」ことがより重要になり、目標達成のためには「伝える」ことを意識した話し方がTOAより必要とされ、実際のコミュニケーションに近い。そのため、教師のFBは内容に関するものに重きをおき、会話の展開に関すること（話すスピードや相手が理解しているかどうかの確認）にも言及した。

ただ、FBは均等に行うだけでは不十分で、以下のような場面では、不足が感じられた。L37の「グラフ発表」(TA)では自身が選んだグラフの説明だけでなく、「選んだグラフからわかること、考えられることを話す」となっていたが、教師が準備段階のFBで指摘しても、グラフからわかること、考えられることがなかなか組み込めない学習者がいたのである。考察については、日本語の能力とはまた別の次元の力が要求される。観察力・考察力はアカデミックな場で必要とされる力であるが、考察の指導までは手が届かないため、Can-doテストの発表では個人の力の差が表れていた。

また、情報読み取りでは、実際の学習者のレベルとレリアアを使用する場合の差をどう埋めるかが今後のサポートの課題である。

7. 学習者の Can-do テストやタスクのとらえ方

2022年春学期学修確認調査(授業評価アンケート)共通設問の自由記述一覧から、これら Can-do テストやタスクに関わるコメントを、以下に引用する。

- ・ The Can-do tests for me are particularly helpful since it helps me to speak Japanese more.
- ・ I like how interactive the class is because I think the discussions and dialogues help to contextualize and apply the grammar in real-life situations.
- ・ Allowing us to practice our Japanese in a more natural manner by incorporating Japanese college students to class helped immensely.

Can-do テストが現実でのコミュニケーション場面での文脈化をし、役立つものであったこと、数回設けることができた日本人大学生の授業参加は彼らと内容について話すものであったが、それらが実際のコミュニケーションのよい練習にもなったことがうかがわれる。真正性のあるタスクが学習者自身のことばで役に立つと語られたと言えよう。

8. まとめと今後の課題

本実践では、CEFR の Can-do Statements の理念に基づき、この学習によって何ができるようになったかを評価するため、筆記試験のほかに口頭表現・文章表現を評価する Can-do テストを導入していることを述べた。Can-do テストは構造シラバスの初級総合教科書においても、プロセスシラバスによって言語活動別の熟達度を意識しながら、生活・留学・就労の分野別の言語能力記述文を具体的に柔軟に作成できることを示した。レベル設定は A2 から B1, B2 へ、また、タスクは TOA から TA や Task など、意味内容の伝達に重きを置いたものにシフトしていくことで連続性を保ち、教室外における実践的な言語運用力の養成を意識し、初級後半修了後も継続的、自律的な学習の促進を常に視野に入れた学修設計が可能である。

タスクの種類に関していえば、今回、タスクに該当しなかったその他の暗記型や、言語モデルがある TOA は、学習した言語知識がモデル・ダイアログの中で正しく使われているかどうかを確かめるだけのものとして教授側、学習者側から捉えられがちではあるが、モデルを示してそれに倣うことは必要なステップであることも指摘したい。TOA の段階を経た TA, Task のようなタスクはより自然なコミュニケーションに近づく活動であり、日本で大学生活を送る学習者には必要なものである。真正性の高い活動は、教室外のコミュニケーションにより近づく。Can-do テストの連続的な実施は中級への円滑な移行に結びつくものであると言えよう。

最後に、Can-do の目標を高度に達成する学習者がいる一方で、すべての学習者が同じように Can-do の目標を達成したわけではないことを省みる必要がある。G30国際プログラムのカリキュラムは非常にタイトであるため、学習者によっては専門科目の課題で余裕がなく、日本語科目への取り組み時間が不足することもある。また、学習項目が多いため、教授側も Can-do テストの FB, 評価のための十分な時間の捻出が難しい。現状では Can-do テストにおいては個々にサポートする時間の限界や進度に追いつかない学習者も一定数いる。グループ評価ではレベル差がカバーされる効果も期待できるが、個人評価のタスクでは、課題達成のために、何らかの指導の工夫が必要である。

参考文献

- 斎藤あずさ (2016) 「文型積み上げ型授業から課題遂行型授業への移行—CEFR と JF 日本語教育スタンダードを参照した授業実践報告—」ヨーロッパ日本語教師会 (編) 『第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告発表論文集』 pp.289-294
- 高島英幸 (2005) 『文法項目別英語のタスク活動とタスク—34 の実践と評価』大修館書店 pp.3-24
- 文化庁 (2022) 「日本語教育の参照枠」の活用のための手引き https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_80/pdf/93677801_02.pdf (2023年4月26日閲覧)
- Ellis, Rod. (2003) *Tasked-based Language Learning and Teaching* Oxford University Press pp.27-33